ISSN　0285-0117
筑波大学附属図書館報　2003年３月
THE UNIVERSITY OF TSUKUBA LIBRARY BULLETIN

つくばね vol.28no.4

● 目次

1　蔵書自慢
3　電子図書館シンポジウム報告
6　本学教官寄贈著書紹介
7　私の一冊
8　Ask Us　としょかんミニガイド
9　とぴっくす
10　掲示板

蔵書自慢

井上　修一

私はドイツ文学を学んでいるが，その中でもとくにオーストリアの文学を読むことが多い。ドイツ人が書いたものより当たりが柔らかくて好きだからである。持っている本もオーストリア関係の比率が高い。

オーストリアは小さな国で，人口はわずか800万にすぎない。お隣の人口8000万の大国ドイツとは言語も民族も同じであるから，飲み込まれてしまいそうである。オーストリアの新聞のオーナーはたいがいドイツ人であるといえば，その危険のほどがお分かりいただけると思う。資本がドイツでは，いくら独立，不偏，中立の紙面を作るといっても自ずから限界がある。

ドイツと国境を接するザルツブルク州はオーストリア・アルプスの中でも風光明媚な土地として知られているが，この州の高級別荘地の売買はドイツ人不動産屋の手に握られている。所有者も購入者もドイツ人だからである。ドイツの前首相ヘルムート・コールは在任中，意地の悪い記者からなぜ休暇をドイツではなく毎年オーストリアで過ごすのかと問われたとき，「オーストリアはドイツではないが，外国でもない」と応えた。ドイツの首相から独立国扱いを受けていないのであるから，オーストリアの文学がひとくくりにドイツ文学と呼ばれているのも止むを得ない。

ところが，第二次世界大戦中にナチス・ドイツに占領された苦い体験などもあって，戦後，オーストリアの文学をドイツ文学から切り離し，独立させようという動きが活発になっている。オーストリアにはドイツ文学と一味違う独自の文学が存在するはずだという小国の自己主張である。

しかし今日までのところ，オーストリア文学の特質をドイツ文学との対比において説得的に論じた書物は目にしたことがない。オーストリア文学が存在すると考えている人がいる以上，存在するはずだという確信でしかなく，神の存在証明の域を出ていない。

ただ，オーストリア人の肩を持つわけではないが，二十世紀のドイツ文学を見る限り，オーストリア系作家の活躍は目を見張らせるものがある。「オーストリア人作家」の定義に少し難しいところはあるが，少なくともオーストリア人の目からすればホーフマンスタールもリルケもカフカ，ムージル，ツヴァイク，さらにはノーベル文学賞を

取ったカネッティもオーストリア人なのである。

しかし，ドイツ人はドイツ文学と異なるオーストリア文学が存在するなどとは全く考えていない。仮にあったとしても，それはドイツ文学の中のアルプス地方の郷土文学に過ぎないと思っている。ドイツ人が編む数あるドイツ現代文学史の中で，東独の文学に独立した章があてがわれていることはあっても，オーストリア文学が独立して扱われることはない。ドイツ文壇のご意見番ライヒ＝ラニツキは自分の編纂した「20世紀のドイツ文学者」（1994）という二巻本にそれぞれ副題をつけている。上巻は「シュニッツラーからムージルまで」，下巻は「ロートからブルガーまで」となっている。四人ともれっきとしたオーストリア人であるが，このドイツ文学界の法王は「オーストリア文学など些細な地方色だから考慮する必要はない」といって意に介さない。

オーストリア文学のこの独立運動はオーストリアの作家の側にも弱みがある。彼らは郷里で少し名前が出ると首都のウィーンに出て行くが，やがて作品をドイツの出版社から出したがる。読者を人口800万より，8000万の中から探した方が得だからである。つまり，オーストリアの作家は一方でオーストリア文学のアイデンティティーを主張しながら，他方ではドイツの作家になりたがる。ドイツの一流書評紙に取り上げられ，ドイツの一流出版社から本が出るようになってはじめて，オーストリアの作家として一人前になるのである。

ドイツ文学と異なるオーストリア文学が存在するかどうかは分からない。しかし，オーストリア人が文化的アイデンティティーを求めようとする気持ちはよく分かる。大国ドイツに隣接する小国としては，文化以外に自己主張の道がないのである。

しかし，大掛かりな文化事業を行うにしてはオーストリアという国の規模が小さすぎる。したがって，この国には多くの国が持っている文化財で，ないものがたくさんある。たとえば，国語の辞典である。国語の辞書はドイツのドイツ語辞典で間に合わせている。その穴を埋める形で申し訳程度に，簡単なオーストリア方言事典が出ている。

百科事典もない。ドイツは17世紀以来，本格的網羅的な百科事典を持っている。ただ，古い百科事典の中には百科事典と言わずに会話事典（Conversationslexikon）となっているものもある。社交界で気の利いた会話をするための道具だったのである。そしてそこにはもちろんオーストリアのことも載っている。しかしドイツに比べると取り上げられ方が少ない。そこでオーストリアはオーストリア事典を編纂して，ドイツの百科事典の不足を補っている。その種のものの中で一番本格的なのは，1883年から刊行の始まった「解説と図説によるオーストリア・ハンガリー帝国（Die österreichische-ungarische Monarchie in Wort und Bild）」（24巻）であろう。当時の皇太子ルードルフが編集協力したことでも知られる。もっとも，これは文化誌体系といった方がよく，アルファベット順にもなっていないので，事典の中に入れるのは不適当かもしれない。

ところで，オーストリア人は人名事典が好きなので，オーストリア人名事典ならいくつかある。現在もオーストリア科学アカデミーによる本格的なものが刊行中である。第二次大戦の敗戦から国が立ち直るとすぐに編纂に取りかかったもので，1957年に刊行が開始され，現在は第10巻のＳのところまでたどりついている。

人名事典の企画は第一次世界大戦直後にもあった。ベテルハイムによる人名事典，伝記集，文献・資料の三部からなる壮大な計画であった。敗戦でハプスブルク帝国が消滅し，領邦国家が独立していったので，帝国全体の記録を残そうとしたのである。しかしこれは構想が大き過ぎ，伝記の刊行が始まっただけで，他の企画は頓挫してしまった。伝記集だけはこれまで二十二巻を数え，現在も続巻の編纂が続いている。刊行中の先の人名事典とこの伝記集は本学の中央図書館にも入っている。

1848年の市民革命の失敗の後にも人名事典が出たことがある。ヴルツバハの編纂による60巻に及ぶ記念碑的な「オーストリア帝国人名事典」である。1750－1850年の100年間だけを対象にして60巻

解説と図説によるオーストリア・ハンガリー帝国

オーストリア帝国百科事典

であるから，記述は詳細を極めている。こちらは，一橋大学と名古屋大学，山梨医大に入っている。

革命や戦争などによる国家存亡の危機を克服すると，まず国家的事業として自国の人名事典の編纂を考えるところが，いかにもオーストリア人らしい。オーストリアという国では人間関係が大切で，素性と肩書とコネが物を言うのである。

百科事典と銘打っているが，実際にはオーストリアの記述しかない事典が刊行されたことがある。1835年から37年にかけて出た６巻本の「オーストリア帝国百科事典（Oesterreichische National-Encyklopädie oder alphabetische Darlegung der wissenswürdigsten Eigenthümlichkeiten des österreichischen Kaiserthumes)」である。第６巻の「あとがき」によれば，この事典は優れていたので刊行が始まるとたちまち，ザクセン公国とスイスで企画や体裁，タイトルを模倣したものが出たという。

私の自慢の蔵書は前述の「解説と図説によるオーストリア・ハンガリー帝国」全巻とこの「オーストリア帝国百科事典」である。正確に言えば，入手に至るまでの長年の努力が実ったことをうれしく思っている。ベルリンの壁が壊れる前にブダペストの古本屋にあったものを，ウィーンの古本屋を通して購入した。冷戦時代，東欧はドイツ・オーストリア関係の古書の宝庫で，しかも大変安く買えた。

いずれも刊行当時の帝国の様子が具体的に書かれているので面白い。私はこの二つを主として知ったかぶりをするために使っている。ことに後者は，日本では個人も大学も他に持っている人がいないと思われるので，安心して使える。私の文字通りの「会話事典」である。

（いのうえ・しゅういち　文芸・言語学系教授）

電子図書館シンポジウム報告

筑波大学・図書館情報大学統合記念公開シンポジウム「電子図書館の軌跡と未来－ますます広がる図書館サービス」

標記シンポジウムが，筑波大学知的コミュニティ基盤研究センターと筑波大学学術情報処理センターとの協賛で，平成15年１月24日(金)に開催されました。これは，筑波大学と図書館情報大学に先導的電子図書館が設置されて４年が経過したことを機に，これまでの経過を振り返ると同時に，電子図書館について，将来の有るべき姿を描くことを目的として企画されたものです。会場となった筑波大学大学会館国際会議室には200名を超える参加者が集まりました。